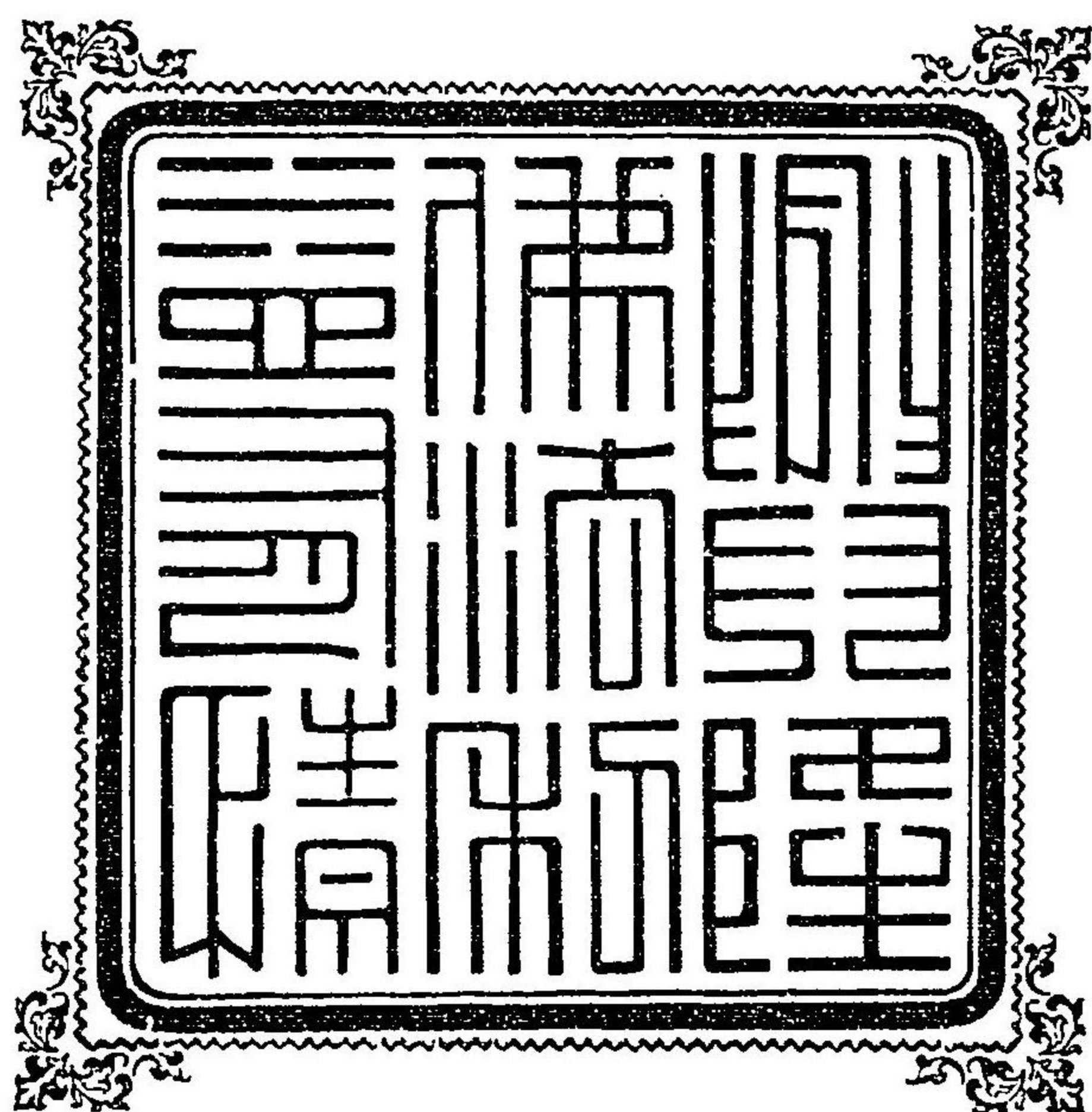
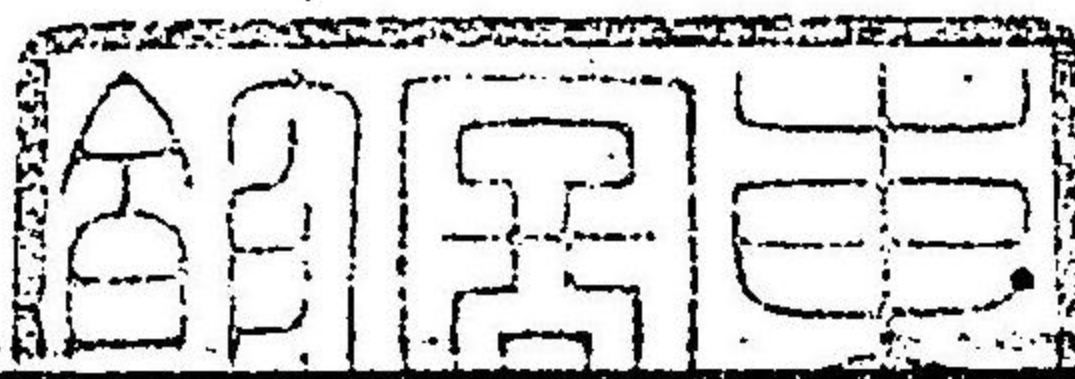




獅
乳





普勸坐禪儀

原夫道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費功夫。況乎全體迥出。

塵埃。發執信拂拭之手段。太都不離當處。兮。豈用修行之脚頭。

者乎。然而毫釐有差。天地懸隔。違順纒起。紛然失心。直饒誇會。

豐悟。兮。獲瞥地之智通。得道明心。兮。舉衝天之志氣。雖逍遙於。

大頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。矧彼祇園之爲生知。兮。端。

坐六年之蹤跡。可見。少林之傳心印。兮。面壁九歲之聲名。尙聞。

古聖既然。今人盍辨。所以須休尋言。逐語之解行。須學回光返。

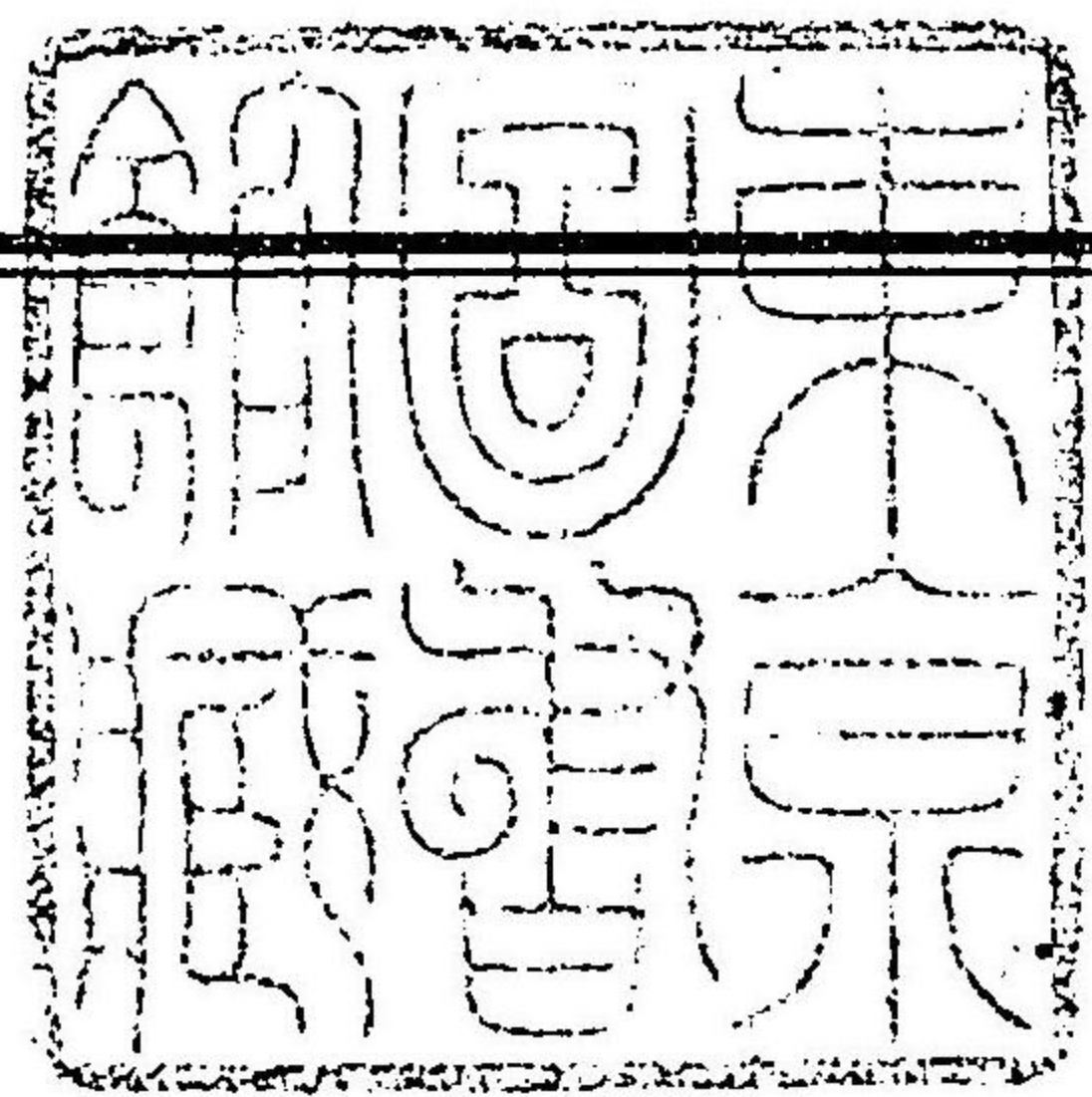
照之退步。身心自然脫落。本來面目現前。欲得恁麼事。急務恁。



麼事。夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。尋常坐處。厚敷坐物。上用蒲團。或結跏趺坐。或半跏趺坐。謂結跏趺坐。先以右足安左脛上。左足安右脛上。半跏坐。但以左足壓右脛矣。寬繫衣帶。可令齊整。次右手安左足上。左掌安右掌上。兩大拇指面相拄矣。正身端坐。不得左側右傾。前躬後仰。要令耳與肩對。鼻與臍對。舌掛上腭。唇齒相着。目須常開。鼻息微通。身相既調。欠氣一息。左右搖振。兀兀坐定。思量箇不思量底。不思量底如何。思量非思量。此乃坐禪之要術。

也。所謂坐禪。非習禪也。唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。公案現成。羅籠未到。若得此意。如龍得水。似虎靠山。當知正法自現前。昏散先撲落。若從坐起。徐徐動身。安詳而起。不應卒暴。嘗觀超凡越聖坐脫立亡。一任此力矣。况復拈指竿針錘之轉機。舉拂拳棒喝之證契。未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也。可爲聲色之外。威儀那非。知見之前。軌則者歟。然則。不論上智下愚。莫簡利人鈍者。專一功夫。正是辨道。修證自不染污。趣向更是平常者也。凡夫自界他方。西天東地。等持佛印。一擅宗風。唯務打坐。被礙兀地。雖謂萬別千差。祇管

參禪辨道。何拋却自家之坐牀。謾去來他國之塵境。若誤一步。當面蹉過。既得人身之機要。莫虛度光陰。保任佛道之要機。誰浪樂石火。加以形質如草露。運命似電光。倏忽便空。須臾卽失。冀參學高流。久習摸象。勿怪真龍。精進直指單的之道。尊貴絕學無爲之人。合沓佛佛之菩提。嫡嗣祖祖之三昧。久爲恁麼。須是恁麼。寶藏自開。受用如意。



獅乳

勅賜性海慈船禪師 垂示

侍者 靈峰筆記

嚮きに篤信の居士等三五輩來て謁を吾が禪師の
猊下に請ひ切に參禪の要旨を拜問す禪師これに
授くるに高祖大師の普勸坐禪儀を以てせらる居
士等退いて捧讀數過其初め甚た解し易きに似た
りと雖も愈讀めは愈疑ひ遂に其的旨に通曉する
こと能はず更に來謁して其講授を拜承せんこと
を懇請す禪師曰く吾太祖國師曾て誠めて云く十
たひ言はんと欲して九たひ休し去り口邊醜生し

て臘月の扇の如く、風鈴の空に懸りて四方の風を問はざるか如き、是れ道人の風標なりと、然れども今や三請已むことなし、豈四實に従はざらんやと、乃ち句を逐ひ章に随ひて苦口丁寧、恰かも慈母の飯を嚼みて嬰女を養ふか如し、靈峰常に左右に侍して悉く之を筆記し、遂に冊を成すに至る、頃者一本を淨寫して、禪師の電囑及び其題號を請ふ、禪師叱斥して曰く、古句に之あり、饑ては鄰家の乳を買ひ、寒うしては祖母の針を勞すと、本と是れ鄰家の乳、以て一時の饑渴に充せるのみ、何ぞ再び之を顧みるに足らんやと、靈峰默然として退き、遂に聊か

冠註を加へ竊に之を印工に附し、且つ題して獅乳と曰ふ、蓋し聞く獅子一滴の乳、これを迸散すれば六斛と、讀者果して能く之を迸散して六斛と爲すを得は、吾が願足りぬ、

乙未夏安居の日

石田靈峰謹識

禪師一時參問の居士等に示して曰く、古今東西參禪の客多し、我國近時復た其風潮頗ふる盛なりと聞く、然ども多くは是れ禪理を參攻するに非ざれば、則ち只其禪話を拈弄するに過ぎざるに似たり、然り而して其坐禪を以て眞參實究する者に至りては、誠に晨

山僧は禪師自ら稱するなり

眉毛云々 碧巖第八則の故事

草裡に輓しては慈悲のために
醜態を忘るゝの謂なり

慈は即ち智慧の省略にして般
若波羅波密の譯語なり

星の寥々たるが如し、甚た以て惜む可しと爲す、居士
等幸ひに信を投じて將に眞參實究せんとす、山僧豈
また眉毛を惜まんや、請ふ試みに草裡に輓して婆說
一場せん。夫れ佛法に證入せんには、從來三慧の門あ
り、一に聞慧と曰ひ、二に思慧と曰ひ、三に修慧と曰ふ、
謂ゆる聞慧とは、或は經論等を講究して、其道理如何
と知り、或は先覺者の指教を受けて、其旨趣如何と識
る、而して後に初めて思慧に入る、思は思量思惟なり、
已に知識する所の道理を思量思惟して、其旨趣の歸
著する所を信解するなり、修慧は則ち修行なり、已に
知識し且つ信解し得たる所の理趣を、實際身心に行

三世は過去と現在と未來とな
り

ひ得て、日夜の行業直に是れ三世諸佛同道の法體に
契ふを云ふなり、古歌に「耳に聞き心に思ひ身に修せ
は早晚菩提に入るぞ樂しき」と、簡にして要を得たり
と謂ふべし、然るに世人多くは唯其聞思二門の間に
彷徨して、更に修門に進むことを爲さず、如何ぞ能く
佛法を實證することを得んや、譬へは良藥の能く病
を治する所以の道理を聞知し、且つ具さに其藥法を
思量分別して、其配劑分明なることを信解するも、未
た嘗て一たびも其良藥を服すること有らすんば、如
何して其病を治癒せしむることを得んや、然るに世
人概ね唯其禪理に參し、或は禪話即ち古則公案と云

公案は古來禪祖の卓行偉言以
て後人の標準となすべき者を

稱し之を公府の案牘に比して此の如く謂ふなり

臘月三十日は臘終を謂ふ
閻羅は即ち閻魔王なり

漆桶拂等のこと摸象の下に委し

高祖の語「學道用心集」に見ゆ

へるものを拈提するに過ぎずして、而して之を實參親證なりと誤認す、何ぞ知らん此れ只聞思ぶんしの分際ぶんぎにして、未だ實修の門闥を跨からざるを、故に其能く禪理を談じて縱横無礙なることを得る者も、又能く公案を拈弄して與奪自在なることを得る者も、緊しく其咽喉を扼して實際如何と檢し來れば憐む可し一毫も亦た自由の分なし、臘月三十日閻羅王えんら前また如何ともすること能はざる者あらん、此れ皆未だ佛祖の正傳を得ず、漫に世俗の妄習に隨逐して、漆桶拂帚摸索不着なるに因る、豈痛歎の至りに堪ゆへけんや、高祖大師曰く、身心を決着するに自つから兩般あ

淨祖は高祖の師にて長壽如淨と稱す支那明州天童山景德寺に住す此語は「室度記」に見ゆ

世尊とは釋迦牟尼佛を指す刹那しやくは梵語時間の極短を謂ふ

方便は方法便宜の謂なり

龍樹は釋迦十四代の嫡孫にして迦騰十四世の法祖なり此語

り、參師問法さんしもんぽうと功夫坐禪くわふざぜんとなり、問法は心識を遊戲せしめ、坐禪は行證を左右にすと、應に知るべし問法は心識を遊戲せしむるに過ぎずして、之を實地に行ひ且つ證することは、坐禪を以て其要術と爲すことを、天童淨祖一日吾が高祖に示して曰く、世尊せそん云く聞思は猶ほ門外に處するが如し、坐禪は家に歸りて穩坐するなり、故に坐禪は乃至一須臾一刹那しやくなるも功德無量なり、我れ三十餘年時と與に功夫辨道し、未だ曾て退を生せずと、應に知るべし聞思は一時の方便に過ぎずして、坐禪は長年不退の法なることを、然れども謂ゆる坐禪に亦た種々の差別あり、龍樹菩薩曰く、

は「大智度論」に出つ
外道とは婆羅門教を指す

二乗とは聲聞と緣覺となり

涅槃に四義あり今委悉するこ
と能はず

高祖の語「永平廣録」に見ゆ

坐禪は則ち諸佛の法なり、而して外道にも亦た坐禪あり、然れども外道には著味の過あり、邪見の刺あり、所以に諸佛菩薩の坐禪に同じからず、二乗しやうじやう聲聞にも亦た坐禪あり、然れども二乗は自調の心あり、涅槃ねはんを求むるの趣あり、所以に諸佛菩薩の坐禪に同じからず、我か高祖これを述へて曰く、此坐禪は佛々の相傳、祖々の直指のみ、獨り嫡嗣する者なり、餘は其名を聞くと雖も、佛祖の坐禪に同じからず、所以は如何、諸宗の坐禪は悟を待つを以て則と爲す、譬へは船筏を假りて而して大海を度るか如し、將に謂へり海を度りて船筏を棄つへしと、吾か佛祖の坐禪は然らず、是

法相宗三論宗は奈良時代の宗旨にして、天台眞言は王朝時代に盛んなりき

法身は佛に三身ある其一なり

舍利は梵語なり譯して身骨と曰ふ

れ乃ち佛行なり云々、我國始めて佛法を傳へてより、七百餘年を経て吾か高祖出世したまへり、時に法相三論等の諸宗已に衰へて、天台眞言等の諸宗まさきに盛んなりと稱す、而して是等の諸宗皆坐禪の名を傳ふと雖とも、概ね謂ゆる聞思の門外に躊躇して、未だ佛祖の正行に入る者あらず、是れ吾か高祖に「普勸坐禪儀」の撰述ある所以にして、我國に正眞の佛行を傳へたる、實に此時に在りとす、吾人生れて澆季の運に遭ふと雖とも、幸に此法ほふ身みん舍利せりを拜瞻することを得る何の喜びか、亦た之に加ふる者あらんや、庶幾くは居士等ますます、正信を精勵して、山僧と手を携さへ

俱に親しく佛祖の門庭に入れ、吾豈諸人を欺かんや、然りと雖も凡そ門より入るものは家珍に非ず、人々自つから光明の在る有り、切に忌む佛祖の背後に蹠跟することぞ、

普勸坐禪儀

此篇僅に七百五十八字に過ぎざる簡短の文なれども、是れ實に高祖大師の皮肉なほ煖かなる者にして、我宗の骨髓たゞ此一篇に在り、其他高祖の遺訓甚た多しと雖も、畢竟皆此一篇を根幹としたる枝葉に過ぎずと言ふも敢て誣妄にあらざるなり、謹て按ずるに、高祖大師は諱を道元と曰ひ、又希玄と號し、初めの

高祖の遺訓、正法眼藏九十五卷、廣錄十卷、清規六卷、學道用心集一卷、其他尙ほ多し

當時土御門と稱し今は久我と稱す
基房公は松殿と稱したりき

久我家は太政大臣通忠公家督したまひしなり

藤原師家公の養子たらしめんとの誦ありきとぞ

ほどは佛法房と稱したまひしことも有りきとぞ、御俗姓は源氏にて、御父は村上天皇の皇孫久我内大臣通親公、御母は攝政太政大臣藤原基房公の女、正治二年正月二日、土御門の邸に降誕したまへり、然るに不幸にして三歳の時に父公薨去したまひ、又八歳にして母君にも別れたまひしかば、兄公にて別家したまへる堀川の大納言通具卿の養育を受けたまひ、稍御成長の後、母君の御實家なる藤原氏の家督たらしめ、攝政關白の重職をも襲はしめんと、の企圖なりしに、大師は曾て母君の喪に籠らせたまひし時より、深く人世の無常を觀じ、早く出家して生死の一大事を

遮那に密教にして止觀は顯教なり之を天台宗の兩業と曰ふ
大小は大乗小乗、權實は權教實教

榮西は葉上の僧正と稱し我國臨濟宗の初祖、千光は其證號なり

釋迦如來より二十八代にして達摩大師之を支那に傳へ更に

明らかめんとすの御志やむとき無かりしかば、十四歳の時に蹶然亡命して叡山に登り、公圓大僧正の弟子と爲りて、遮那止觀の兩業は更らにも言はず大小權實の教乘、其文を尋ね其義を搜り、螢雪の功怠たせたまふこと無かりしかど、如何せん佛法の第一本源たる法身自性の義に於て、未だ嘗て決定する所なかりしかは、遂に耆老の指示に従ひ、建仁寺の開祖千光國師榮西僧正の門に入り、始めて禪宗の尊きを知りたまひ、更に僧正の高弟なる明全和尚と俱に宋國に渡りて、三四年間經歷の後、始めて天童山景德寺の長翁如淨禪師の室に入り、佛祖正傳第五十一代の法脈を

二十三世にして高祖に至る

建禪記は建禪和尚の撰に係る高祖の傳記なり

無住禪師は東福開山聖一國師の法嗣なり

廣牀とは坐禪堂即ち僧堂を稱す

相承し、安貞二年に歸朝したまひしが、先づ其第一最初に此「普勸坐禪儀」を撰述したまひて、佛祖單傳の正宗を開示したまひしなり、(其後の高祖の御履歴は「建禪記」もしくは近來公行せる「兩祖傳略」等を看て其大概を知る可し)抑も是より以前に在ても、我國に禪學の風習なきに非ざりしかど、未だ正傳の師家あらざりしかば、何事も純正なること能はざりきとて、其事を無住禪師の「雜談集」に記して曰く、建仁寺の本願榮西入唐して禪門戒律の儀を傳へられしかど、只狹牀にて事々しき坐禪の儀は無かりけり、國の風儀にまかせて、天台眞言など相並へて一向に禪院の儀式は

高祖初め深草に閑居し又宇治に移り後に越前に至て永平寺を開きたまふ

行はれざりしに、時至りて佛法房の上人、高祖深草にて大唐の如く廣牀の坐禪を始めて行はれたり云々、然れば當時なほ坐禪の正儀を知る人も有らざりしかば、普勸の二字を冠らせて坐禪の正儀を朝野の道俗に開示したまひしなり、普勸とは此事の唯僧侶に局れるには非ず、又謂ゆる禪宗に局れる事にも非ず、在家出家を論せず、又宗派の差別を問はず、智愚利鈍に關すること無く、凡そ佛法を實地に修行して、其廣大利益にあつからんと思ふ者は、皆此坐禪を行ふべき旨を示させられたるなり、坐禪と云へることは前に既に略辨したるが如くなれども、更に其字義を言

世教云々大學の語

は、禪は梵語に禪那ぜんなと云ふを省略したるにて、之を漢語に譯すれば靜慮の義となる、靜慮には思慮を靜定せしむるなり、故に又禪定の名あり、夫れ人心思散亂放逸して喜怒哀樂等の爲に其本性を失は、世間日常凡庸の起居動作と雖も、皆決して其正を得べからざることは、三尺の童子も尙ほ能く之を知る所なる可し、故に世教已に曾て言へり、心こゝに在らざれば見れども見えす、聞けども聞えす、食へども其味を知ることを無しと、況や人生最第一の目的たる、宇宙の眞理を達觀して、生死の一大事を決了せんと欲するに於てをや、故に凡夫には凡夫の靜慮あり、二乗には

法性は宇宙萬象の本源たる體性を稱す

涅槃は圓寂の儀なり圓は欠ることなく餘ることなきの意、寂は不變不動の儀なり菩提は譯して道と曰ふ

坐禪は「正法眼藏」中に收む

二乗の靜慮あり、外道にも亦た外道の靜慮あり、然れども是れ此等の禪那は、皆未だ法性の源底に洞達せず、謂ゆる生死の外に涅槃を求め、煩惱の外に菩提を求むる者なるが故に、乃ち悟を以て則と爲すに過ぎずと雖も、今吾が佛祖正傳の禪那は則ち然らず業く既に煩惱即菩提生死即涅槃と確信して、一點の疑情を容れざる當處、即ち其兀々として坐定すべきの地たるを以て、固より彼の凡夫二乗外道等の禪那とは、大に其趣を異にする者なり、其事を高祖大師は、坐禪箴に論して曰く、彼等が所業は、只還源返本の様子なり、徒らに息慮凝寂の經營なり、觀練薰修の階級に及

十地は菩薩の階級にして等覺は菩薩の極位なり

行立禪云々永嘉大師「證道歌」の語

ばす、十地等覺の見解に及ばす、争でか佛々祖々の坐禪を單傳せんや云々、應に知るべし我が謂ゆる坐禪の他家に異なれるや千里萬里なるを、蓋し禪那の妙用たる、行も亦た禪、坐も亦た禪、語默動靜躰安然と云へるは、實に是れ古徳の格言なりと雖も、若し其本體を言は、則ち禪は必らず坐を以て正儀と爲すなり、是れ古來唯坐禪の名實ありて、而して未だ行禪立禪臥禪歩禪等の名稱あらざる所以なり、故に吾か祖師門下に在ては、初心にも坐禪を行ひ、後心にも坐禪を行ひ、造次顛沛にも坐禪を以て其本體と爲すなり、其旨趣法則の如きは、則ち本篇の詳悉する所、當に文

言を承けては云々石頭大師
「參同契」の語

に入て之を參究すへきなり、只要す言を承けては宗
に歸すべし、自分規矩を立すること勿れ、觸目道を會
せずんば、足を運ふも焉くんぞ路を知らん、

道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費功夫。

古人曰く門に入る者は先つ額を見よと、先つ其大體
を確信して而して、其相用に及ぶ之を佛祖屋裏の常
法と爲す、今開卷第一に道本圓通。宗乘自在。と曰ふ、是
れ此八字、一切佛法を究盡して遺す所なし、苟も佛祖
の門庭に入らんと欲する者、豈先つ此の八字に於て
正信を發さざる可けんや、謂く道は履踐する所に名
げ、宗は尊崇する所を言ふ、凡そ十方法界に涉り、三世

十方とは四方四維上下を謂ふ
即ち空間の無限なることを顯

はずの辭なり三世は即ち時の
無限なることを謂ふ

古今に通して、最尊最崇なる所の者、即ち佛祖の大道
なり、佛祖の大道とは如何、曰く覺道なり、覺とは何ぞ、
不妄不變の謂なり、試に見よ、天の覆ふ地の載する、千
古不變なり、火の熱し水の冷なる、萬古不妄なり、百花
の春に開き萬木の秋に凋む、元來虚妄なし、父父たり
君君たる亦た何ぞ彼れが如く眞實ならざる可けん
や、孤月の皎々として照り、積雪の皚々として白き、到
頭變動なし、子々たり臣臣たる、亦た何ぞ此の如く常
住ならざる可けんや、是れ此覺道、本來圓通にして佛
も此より往來し、凡夫も此より出沒す、古人圓通の二
字を釋して曰く、性體周偏なるを圓と謂ひ、妙用無礙

古人云々首楞嚴經卷六の註疏

なるを通と謂ふ、乃ち一切衆生本有の心にして、諸佛菩薩所證の聖境なりと、既に是れ周偏にして無礙なり、故に自在と謂ふ、一切衆生本有の心、直に是れ諸佛菩薩所證の聖境なり、復た何の修證功夫をか要せんや、蓋し修とは修行なり、證とは證悟なり、一切衆生必ず修行の功を積みて、而して後に諸佛に等き證悟を得ると云ふ、是れ諸宗普通の教義なり、然るに今は道本宗乗の圓通自在なる、本體妙用一時に全提して、前後なく欠餘なし、是れ則ち直指單傳の第一義、故に言ふ門に入る者は先づ額を見よと、諸人看るや、呼て道本と爲し宗乗と爲す、亦是れ蛇足、以て圓通と云ひ

自在と云ふ、風なきに浪を起す、祖翁元來舌頭に骨なし、人々各自鼻頭を捏却して如何と見よ、功夫の二字、中世以來誤て思量考索の義と爲す、是れ大に然らず、功は功勞を謂ひ、夫は扶助なり、乃ち今の世俗に、勉強もしくは盡力など言はんが如し、本篇數々功夫の二字を見る、知らずんは有る可からず、又本篇文章六朝駢儷の躰にして、多くは其句を四字六字に作り、隔對を以て之を整理せり、故に字句を整理するか爲めに、或は意餘りて字の足らざる者あり、或は必用ならざるの文字を以て、句格の不足を補ひたる所なきに非ず、然なきだに祖師門下の言詮は、決して字句に拘は

るべきに非ざるを、此篇の如きは別して是等の事由あるを以て、殊に字句に拘泥して眞旨を誤ること無からんを要すべきなり、

況乎全體迥出塵埃兮誰信佛拭之手段太都
不離當處豈用修行之脚頭者乎。

此兩對四句は、前の圓通自在を確實ならしめんが爲めに、證左を引きて其修證功夫を要せざる様子を解釋せられたるなり、全體とは圓通自在なる道本宗乘謂ゆる一切衆生本有の心を總括して之を稱す、塵埃拂拭は黃梅傳法のお故事を以て其證とせられたるなり、謂く達磨大師五代の嫡孫を黃梅山の弘忍禪師と

五祖弘忍禪師は證して大縮と曰ふ

梵語に偈陀または伽陀と云ふ之を譯して頌と爲す

釋尊は伽耶城邊の菩提樹下に坐して正覺を成したまへり

曰ふ禪師の門下常に數百人と稱す、而して神秀上座その高足たり、上座或時偈を作りて五祖の印可を請ひ、佛祖の衣鉢を傳へて第六祖たらんと欲するの志あり、其偈に曰く身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃、と其意に曰く各自六尺の身軀是れ菩提を成すべきの道場なり、而して各自本有の心、譬へは明鏡の臺に當るに似たり、明鏡元來冥暗ならずと雖も、常に塵埃の爲めに染汚せらる、人か本有の心や、もすれば喜怒哀樂等の爲めに其光明を失なふも亦た然り、故に日夜倦怠なく修行の功を積み、以て喜怒哀樂等の塵埃を惹起せしめざらんことを要す、之

六祖は盧氏の人なり行者は寺院の殿役を執るもの稱
曹溪は山の名なり寺を寶林寺と號す大鑑は監號

を坐禪の要術と爲すとなり、其言ふ所誠に適實なるに似たりと雖も、佛祖單傳の的旨を以て之を視るときは、是れ謂ゆる凡夫二乗の禪那を去ること甚た遠からざるものなれば、固より五祖の印可を得べき資格なきものなり、時に盧行者と云へる者あり、卑賤の人にして近日遽に出家し、黃梅山の碓房に在りて大衆の粥飯に供する米を搗けり、竊に神秀の偈を見て之を肯はず、別に一偈を唱へて曰く、菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、と、是れ則ち佛祖單傳の的旨、謂ゆる圓通自在なる所、乃ち五祖之を印可して衣鉢を盧行者に傳ふ、即ち是を曹溪の六祖大鑑慧

能大師と爲す、今吾か高祖其故事を引き來りて乃ち曰ふ、全體はるかに塵埃を出つ、誰か拂拭の手段を信せん、と、證し得て甚た確實なりと謂ふべし、當處を離れず、豈修行の脚頭を用ゐる者ならんや、とは、更に丁寧反復せられたるのみ、當處は猶ほ隨處もしくは到處と謂はんが如し、造次顛沛起居動作何の處か圓通自在ならざらん、世俗すら尙ほ言ふ、道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非すと、況んや佛祖の大道をや、然るに若し他方に求めて、而して修行を脚頭に費やすこと有らば、其眞道を去ること千里萬里ならんとなり、以上都へて大道の本體、元來人々是足個々

辨道話は「正法眼藏」の第一卷

圓成して、毫も欠る所なく、又餘る所なき所以を開示せられたり、各自豈深く正信を發起して祖訓を體究せざる可けんや、然りと雖も只此の如くに信解したるを以て、之を佛祖の大道に契當せりとは爲さず、辨道話に曰く此法は人々分上ぶんじやうゆたかに備はれりと雖も、修せざるには顯はれず、證せざるには得ることなしと、此に至りて祖語銚盾せるに似たり、是れ果して何の道理かある、須からく次下の垂教を熟讀審思して、始めて信得及する所あるへし、

然而毫釐有差、天地懸隔、違順纒起、紛然失心。圓通自在の大道には元來迷悟なし、然るに凡夫妄に

迷悟を認めて之を執着す、今此四句は、先づ其迷相を擧げられたり、謂く違順の纒に起るは毫釐の差に由る、而して紛然として心を失するに至ては、實に天地の懸隔となるなり、違順は凡そ眼に在て諸の色を見る、耳に在て諸の聲を聞く、乃至意に在て諸の事を思ふ、而して心に適すれば之を愛す、即ち之を順と曰ふ、心に適せざれば之を憎む、即ち之を違と曰ふ、大道元來圓通自在にして憎愛すべき者なし、春來りて百花開く、何の憎愛すべき有らんや、秋去りて萬木枯る、亦た何の違順すべき有らんや、然るに人や、もすれば一を喜ひ一を悲む、畢竟其物の故に非ずして、只我が

妄想の轉變のみ、森羅萬象千古萬古圓通自在なり、憎
 愛の爲めの故に開花落葉するに非ず、悲喜の爲めの
 故に月白風清なるに非ず、然れども之に對するの人
 に在て、違順纒に起れば、悲喜こもく增長して、八萬
 四千の煩惱海、怒濤激浪滔天の勢あり、是れ之を紛然
 として心を失すと謂ふ、心を失することは、圓通自在
 なる一切衆生本有の心性を失却するの謂にして、其
 道本宗乗と相距ること、實に天地の懸隔となるなり、
 蓋し按するに此四句本と三祖大師の「信心銘」に出づ、
 曰く至道は無難なり、唯揀擇を嫌ふ、但憎愛なければ、
 洞然として明白なり、乃至毫釐も差あれば、天地懸かに

三祖智者大師遺珠

隔たる、現前を得んと欲せば、順逆を存すること莫れ、
 違順相争ふ、是を心病と爲す、二見に住せず、慎て追尋
 すること勿れ、纒に是非あれば、紛然として心を失す
 云々、今吾か高祖其要領を摘み來て、兒孫に示さる、聖
 者の言句、字々皆典實あることを知る可し、
 直饒誇會豐悟兮、獲瞥地之智通、得道明心兮、
 舉衝天之志氣、雖逍遙於入頭之邊量、幾虧闕
 於出身之活路、

初の四句隔對は、悟の相を擧げ、後の二句は其悟も亦
 た圓通自在の大道に非ざること、を明されたり、會と
 は俗語に謂ゆる合點するなり、會に誇ると云ひ、悟に

三十
豊か^と云^ひ道^を得^ると云^ひ心^を明^むると云^ふ皆^謂
ゆる悟^の相^にして凡^庸なる教^徒禪^者の皆^金科^玉條^と
とする所^{なり}故^に此^の如^きの悟^道に於^て纔^に警^地
の智^通を獲^れは忽^ち衝^天の志^氣を舉^げて佛^を呵^し
祖^を罵^しり盡^大地^に第^二人^{なき}の思^を爲^すもの滔^々
々なる天^下茫^々たる古^今概^ね此^類の人^{たら}さるは
無^し嗚^呼亦^た痛^ましい哉^警へは健^康と疾^病と藥^劑
との如^し前^節の紛^然として心^を失^するは猶^ほ疾^病
に苦^むか如^く此^心を明^らめ悟^に豊^かなるは恰^かも
藥^効に執^着するに以^{たり}夫^れ病^に苦^む本^{より}健^康
の人^に非^ず然^れとも藥^に執^着する豈^復た健^康の人

と謂^ふを得^んや蓋^し眞^實十^全健^康の人^は本^{より}病
なし亦^た何^そ藥^を要^{せん}や熟^思して其^梗概^を知^る
可^し警^は字^書に過^目なりと註^し纔^に見^るの義^{なり}
智^通は智^慧なり通^達なり衝^天は其^志氣^の甚^た揚^れ
るを形^容す然^れとも是^れ只^入頭^の邊^量に逍^遙する
に過^きすして尙^ほ出^身の活^路を虧^闕せりとなり入^頭
と云^ひ出^身と云^ふ亦^た警^地の智^通を獲^るの意^本
より反^對の事^に非^ず今^は只^其邊^量と活^路との二^語
に着^眼すへきなり今^夫れ警^地の智^通を得^て衝^天の
志^氣を舉^る者^之を彼^の紛^然として心^を失^{せる}迷^妄
者^に比^すれば頗^る道^本宗^乘の邊^際に逍^遙するに似

正宗分は佛經概れ三分して
序分と正宗分と流通分と爲す
今の俗に序論本論結論と言
はんが如し

たりと雖も、尙ほ未だ其眞際に達すること能はず、又
其道を得、心を明らめたる者を以て、之を彼の天地懸
隔せる者に比すれば、優に出身の道に遊ぶに似たり
と雖も、尙ほ未だ活潑々地の直路を得ずとなり、逍遙
は翺翔自在の貌と註す、鳥の空中を飛行して障礙な
きが如し、
矧彼祇園之爲、生知兮。端坐六年之蹤跡、可見。
少林之傳、心印兮。面壁九歲之聲名、尙聞。古聖
既、然。今人盍辨。
是より以下實に本篇の正宗分と爲す、先の第一最初
に、佛祖の勝鬪を擧げて、坐禪の尊勝なることを示し、

因地とは原因の地と言はんが
如く修行の人の位地を謂ふな
り

須途多長者常に孤獨の人を慰
て衣食を給す故に又給孤獨長
者と稱す

且つ言ふ所の坐禪は、學徒因地の修行のみに非ず、聖
賢果位の常行なることを顯はされたり、祇園とは釋
迦牟尼佛を指し、少林は達磨大師を謂ふ、蓋し按する
に天竺の舍衛國に祇陀太子と云へるあり、清淨閑寂
なる園林を有したりき、時に須達多と云へる、富豪の
人あり、其園林を購ひ得て、一大精舍を作り、之を釋迦
牟尼佛に獻せり、而して其築造の材木は祇陀太子の
寄附する所多く、且つ其地亦た本と太子の有たりし
を以て、世に祇園精舍と稱したりと云ふ、生知は聖人
の美稱なり、論語に生れながらに之を知るは上なり
と云へる是なり、少林は支那嵩山の一峰に少林山と

解脱とは煩惱の束縛を解き生死の輪籠を脱するの謂なり

八相の事今委悉するに違あらす

久遠とは限りなき古代と云ふの意其實は無始を謂ふなり

云へるあり、佛陀禪師と云へる人、曾て一寺を此地に建て、少林寺と曰ふ、後に達磨大師來りて此に住すること亦た久し、端坐六年とは、釋迦如來初め出家したまひて、外道の法に従ひ種々の苦行を修すること多年、然れども遂に解脱の道を得ず、是に於て斷然苦行を棄て、諸の正行たる坐禪を修すること又六年、乃ち無上正覺を證して、八相成道の形式を示したまふ、蓋し釋迦は是れ久遠實成の古佛なり、然れども今一切衆生をして修證の正行を知らしめんが爲めの故に此端坐あり、乃ち此端坐は新たに證果を求むるが爲めに端坐したるには非ざることを顯はさんと

佛心印とは佛の心を以て佛の心の印證を爲すの意
東土は支那日本等を指す

欲して、特に生知と謂ふ、達磨の面壁九歳せる亦た然り、達磨の支那に來れる、只其佛心印を東土に傳へんが爲めなるのみ、固より悟道を求むるが爲めに、少林に冷坐したるには非ざるなり、既に悟道を求むるが爲めには非ず、然れども單々として面壁せること此の如し、固より證果を要するには非ず、然れども兀々として端坐すること彼が如きもの、是れ則ち先佛曩祖の勝躅なり、豈唯我が釋迦達磨のみ然りと爲さんや、十方三世の一切諸佛、皆唯端坐面壁を以て其常行と爲したまへるなり、何ぞ只た六年九歳のみならんや、無始劫來盡未來際、生々世々に單々兀々たる、是れ

則ち佛々祖々の正傳したまふ所なり、中古以來看話
 の禪風盛に扇き、唯古則公案を拈弄するを以て參禪
 と爲し、遂に坐禪の正儀を失する者なきに非ず、又或
 は之に反して、専ら痴坐を事として、單に虚禮の如く
 し、一生を枯木死灰裡に放過し去る者あり、俱に是れ
 澆世の弊風にして、識者の痛歎する所なり、試みに思
 へ彼の古則公案なるもの、多くは是れ曹溪少林の興
 かり知らざる所、畢竟唐朝以來名匠碩徳の實踐に係
 る歴史上の逸話のみ、然るに唯此史話に向て模擬考
 索し、知解情量を逞しうして、謂ゆる警地の智通に似
 たることあるも、絶えて佛祖の行履に倣はず、却て面

宏智は天童山の正覺禪師なり
 此語は從容録の第二則に出つ
 萬松行秀禪師「從容録」を著す

壁端坐を罵しりて邪法の如くする、何ぞ慚愧を知ら
 さるの甚きや、釋迦何の處にか古則を功夫せる、達磨
 誰が爲にか公案を授けたる、公案を授けすと雖も、面
 壁を以て生涯となせり、古則を功夫せすと雖も、端坐
 を以て常行となせり、然りと雖も佛祖の面壁端坐は、
 決して枯木死灰裡に放過し去れるには非ざるなり、
 宏智禪師曾て達磨を頌して曰く、寥寥として少林に
 冷坐し、黙々として正令を全提すと、萬松老人之に著
 語して曰く、老て心を歇めず、猶ほ自から兵機を説く
 と、蓋し正令とは嚴正なる號令の義、即ち軍隊に將た
 る者の士卒を指揮するなり、全提は全分悉く提起す

るの謂にして、一毫も寛假する所あらざるなり、今之を借りて少林の面壁に譬ふ、應に知るべし只此寥寥黙々たるもの、十方諸佛及び一切衆生の死生與奪皆係る、豈唯三軍勝敗の比のみならんや、然るに誤て枯木死灰裡の痴坐を以て、虚志く一生を放過し、之を以て佛祖の正令に擬せんと欲せば、譬地の智通だも亦た得ること能はざらん、豈戒愼せざる可けんや、古聖既に然り、今人盡ぞ辨ぜざるとは、上を結て下を起す、
 所以須休尋言、逐語之解行、須學回光返照之退步、身心自然脫落、本來面目現前、欲得恁麼事、急務恁麼事。

此六句三對は、初の一對に參禪の必要を勧め、次の二對に其功勳を明かし、後の一對に其實行を促がす、言を尋ね語を逐ふの解行に大凡二種あるべし、一は經論の文句に拘泥して、以て正解正行なりと誤認するもの、是れ古來多數の教徒皆其範圍を出ること能はざる所にして、華嚴經に人の他の寶を數へて自ら半錢の分なきが如く、法に於て修行せず、多聞なるも亦た是の如しと誡めたまへる、又證道歌に吾れ早年よりこのかた、學問を積み亦た曾て疏を討ね、經論を尋ね名相を分別して休することを知らず、海に入て沙を算へ徒らに自から困したりきと、慨きたる皆是な

圓悟克勤禪師「悟教集」を著はす此語其第二則の垂示に見ゆ

仰山慧寂禪師は僞仰宗の祖なり此語「傳燈錄」師の本傳に出

り、一は彼の古則公案等の言句に纏綿せられて、實解實行なりと妄信するものなり、一は佛經に依り一は祖錄に依る、其依る所是ならざるに非ざるも、言を尋ね語を逐へは、其病たるや一なり、圓悟禪師曰く、箇の佛の字を説くも、拖泥帶水、箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶と、此れ之を謂ふなり、故に須からく之を休止すべしと訓誡せらる、回光返照とは、心の物に移りゆくを光の物を照すに譬へ、其光を回らして自己に返し照せとなり、例へば眼に美色を見れば、心之に隨ひて之を愛し貪ほり見る、然るに之を自己に反省して、何者か彼の美色を貪ほり見るぞと返し照すなり、仰

高祖の語「學道用心集」に出つ

山禪師曰く、汝等諸人各自に回光返照せよ、吾が言を記すること莫れと、是れ他人の言句に動轉せらるゝを、誡めたるなり、蓋し人の言句を記臆すれば、心其言句に隨ひ移りて、自己の本心を失ふを以てなり、退歩は讀て字の如し、其意は則ち回光返照に同じ、高祖しばしば此語を用ゐたまふ、宏智禪師曰く、汝但歇し去れ、歇し得盡る時、靈然として味まさす、更に須からく退歩して、己に就て方に能く徹底相應すべし、高祖大師曰く、若し證眼を廻らして行地を願れば、一翳の眼に當る無し、將に見んとすれば、白雲万里、若し行足を舉げて證階に擬せば、一塵の足を受る無し、將に踏ま

んとすれば天地懸隔す、是に於て退歩せば、佛地を躑
 跳すと蓋し參して此に至れば、退歩の學また容易な
 らざるを知るに足らん、抑も世間百般の學藝道術、悉
 く進歩を以て其則と爲さざるは無也、然るに唯我が
 佛祖の學道、特に退歩を以て緊要の法と爲す、其世情
 を以て之を模擬すべきに非ざるを、知れ、其れ然り
 此の如く休し去り、此の如く學し來れば、身心自然に
 脱落して、本來の面目現前すべしとなり、脱落とは脱
 は解脱にして、一切の纏縛を離るゝなり、落は廓落灑
 落磊落等の落の字の如し、百般の障礙を離れて拘束
 せらるゝ所なきを謂ふ、即ち道本宗乘の圓通自在を

「寶慶記」高祖かつて淨祖に參
 問する時の筆記なり

自己の實踐に證得したるに名くるなり、自然は時節
 因緣純熟するの義なり、既に言を尋ね語を逐ふの解
 行を休して、回光返照の退歩を學するときは、身も心
 も自づから脱落の境界となり、脱落の當躰、直に自己
 の身心と爲り來りて、更に活機妙用を運轉すること
 自在無礙なるに至る、之を身心脱落脱落身心と謂ふ、
 此語曾て天童淨祖の我か高祖に示したまふ所、具さ
 に「寶慶記」及び「永平廣錄」等に見ゆ、志士は必らず就て
 看よ、本來面目とは謂ゆる一切衆生本有の心、未だ曾
 て違順紛然に涉らざるの真相、即ち圓通自在の道本
 宗乘、各自日夜の運作轉動に活用し來りて、一毫も染

汚なきもの、是れ之を本來面目の現前と謂ふ、例へば春花秋月を見るが如き、花を見ること花のまゝにして、我心に憎愛なく、月を見ること月のまゝにして、我心に違順なし、然かも違順なしと雖も、月色の晦明盈虚を辨すること誠に正當なり、曾て憎愛せずと雖も、花の開落醜美を明らむること甚た眞確なり、佛を見る衆生を見る、地獄を見る天堂を見る、世間を見る出世を見る、皆然らざるは無し、是に於てか參禪の能事思ひ半に過ぎん、**恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ。**恁麼は宋國の俗語にして、是の如しと云ふの意、今此に恁麼の事を得んと欲せはと云へる

淨祖の語「寶慶記」に出つ

五欲は財色食名睡又は色聲香味觸五蓋は貪欲、瞋、癡、慢、疑、悔、疑、惑を謂ふ、是れ皆眞智を蓋覆するを以て蓋と名く、高祖の拈提は「永平廣錄」に出つ

は、上に述る所の身心脱落を指し、恁麼の事を務めよとは、下に説く所の坐禪を謂ふ、天童淨祖曰く、身心脱落とは坐禪なり、**祇管打坐の時、五欲を離れ五蓋を除くと、我か高祖之を拈提して曰く、參禪は身心脱落なり、祇管に打坐せよと云ふの道理を聽かんと要すや、心も縁すること能はず、言も議すること能はず、直に退歩して荷擔すへし、切に忌む當頭諱に觸るゝことを、風月寒清、古渡頭、夜船撥轉、瑠璃地と、諸人會すや、夫、參禪者、靜室宜焉、飲食節矣、放捨諸緣、休息萬事、不思善惡、莫管是非、停心意識之運轉、止、念想觀之測量、莫圖作佛、豈拘坐臥乎。**

以下正しく坐禪の儀標を開示せらる、先づ初に總して參禪の大體を訓誡したまふ、此に參禪と云ふは、彼の禪理を參攻し、禪話を參究するの謂に非ず、直に須からく參禪とは坐禪なり、坐禪とは身心脱落なりと信修すべきなり、故に其場を言へば靜閑なる室内を宜しとす、直に須からく深山幽居に安居して、聖胎を長養すべしと云ふは、祖訓の正儀なり、然れども永嘉大師曰く、未だ道を見ずして山に入れば、只山を見て而して道を見ずと、又坐禪せば四條五條の橋のうへ往來の人を深山木と見てと云へるも亦た可ならざるに非ず、然れども往來の人を深山木と見るは山に

祖訓は淨祖及び高祖の常に訓誡したまふ所にして「寶慶記」なよひ「永平廣錄」等に散見す

永嘉の語は「永嘉集」に見ゆ

大光院は尾州名古屋に在り

着するなり、直に須からく往來の人を往來の人と見て、而して四條五條の橋の上に坐禪するの人たるべきなり、要する所は身心脱落に在り、飲食節ありとは身體の安健を謀る、日中一食を以て正儀と爲すと雖も、亦た朝粥及び晩間の藥石を許さるるにも非ず、要する所は飢えず飽かざるに在り、山僧幼にして大光泰門和尚に投して剃染す、時に雲衲數十名日夜參禪辨道す、厨下枯淡にして粥飯粗薄なり、年少氣銳のもの概ね暴食を顧りみず、山僧十八九歳の時檀越森本善七の別莊雙竹庵に攝心す、時に始て節量食の慎むべきを知る二十三歳にして奕堂禪師に龍海院に見

奕堂は勅特賜弘濟慈德禪師なり龍海院は上州前橋に在り

作務は灑掃または採薪汲水
および炊事等を謂ふなり

再請は一椀已に喫し了りて
更に二椀に及ぶを謂ふ

太祖の紹述は、坐禪用心記に
見ゆ

ゆ、衆僧百餘粥飯甚た枯淡なり、禪師軀幹長大膂力人
に過ぎ、衆に先ちて作務に勞す、一人常に數人に當る、
然るに其食量を見れば、朝粥僅に一鉢にして午齋ま
た再請せず、山僧その節量の嚴なるに驚ろく、師家已
に然り、吾豈之に倣はざらんやと、乃ち粥飯必らず一
鉢を以て量と爲す、爾來幾と四十年皮肉頑健にして、
坐作進退尙ほ安穩なることを得るもの、皆是れ節量
食の賜なり、既に靜室に就き、身體また安健なり、是に
於て諸縁を放捨し、萬事を休息せよとなり、太祖國師
之を紹述して曰く、技藝術道醫方占相皆遠離すべし、
況や歌舞妓樂誼諍戲論名聞利養悉之に近く可から

高祖に古教照心の家訓あり

す、頌詩歌詠の類、自つから淨心の因縁たりと雖も、好
て營むこと莫れ、文章筆硯も擲下して用ゐされ、美服
と垢衣と俱に着用すべからず、復た古教の如きは、照
心の家訓なりと雖も、多く之を見、之を書し之を聞く
べからず、多きときは則ち亂心の因縁なり、凡そ身心
を疲勞するは、悉く發病の因縁なり、火難水難風難賊
難、及ひ海邊酒肆姪房寡女處女妓樂の邊、並に打坐す
ること勿れ、國王大臣權勢の家、多欲名聞戲論の人も
亦た之に近住することを得ざれ、大佛事大造營は最
も善事たりと雖も、坐禪を専らにする人は之を修す
べからず、説法教化をも好むことを得ざれ、多衆を好

樂し、弟子を貪求することを得ざれ、多行多學することを得ざれ、極明極暗極寒極熱、乃至遊人戲女の處、並に打坐すること莫れ、叢林の中、善知識の處、深山幽谷これに依止すへし、綠水青山これ經行の處、溪邊樹下これ澄心の處なり、無常を觀して忘るべからず、是れ探道の心を勵ませばなり云々、往昔佛祖の諸縁を放棄し萬事を休息し來れる様子、應に知るべきなり以上は専ら身を調ふる上に就て教訓せられ、以下は主として調心の術を開示せらる、謂く善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉を休め、念想觀の測量を止めよと、是れ亦た宜しく古人の訓誡を參考

大師の旨「傳燈錄」に見ゆ

六祖の語「法寶璣經」に出づ

百丈の語また「傳燈錄」に見ゆ

して、以て祖意の在る所を知るべきなり、達磨大師常に二祖の爲めに教へて曰く、外に諸縁を息め、内に心喘くこと無く、心牆壁の如くにして、以て道に入るべしと、六祖大師も亦た曰く、汝若し心要を知らんと欲せば、但一切善惡都べて思量すること莫れ、自然に清淨の心體に入ることを得んと、百丈禪師曰く、汝等先づ諸縁を歇め、萬事を休息し、善と不善と、世出世間の一切諸法、皆記臆すること莫れ、緣念すること莫れ、身心を放棄して、其をして自在ならしめよ、心木石の如く、辨別する所なく、心所行なく、心地若し空なれば、慧日自づから現じ、雲開いて日の出るか如く相似んと、

是等列祖の家訓を體悉して、以て參禪の大體を知らは、決して後世澆濁の弊に陥ること無きを得ん、心意識と云へること、天台の輔行に曰く、境に對して覺知すること、木石に異なるを名けて心と爲す、次に心に籌量するを名けて意と爲す、了々として別知するを識と爲す云々、又或は之を八識に配して其名相を分別する者あり、是れ唯識の百法等に詳悉する所なり、又念、想、觀と云ふが如きも、諸經論に説く所區々紛々たりと雖も、要する所は各自心思の運轉測量を分別したるに過ぎず、但其心意識と云ふは、吾人の心の迷執に運轉する邊に於て之を言ひ、其念、想、觀と云ふは

「唯識論」に百法を説き「俱舍論」に七十五法を説く

生老病死これを四苦と云ふ
人無我、法無我の二こと今委悉するに違あらす

各自の心の證悟を測量する邊に於て之を言ふ、例へは肉體の無常を念起して、生老病死の苦惱を臆想し、遂に人無我の觀解に入ると云ふが如きの類なり、此に尤も緊要なるは作佛を圖ること、莫れ、豈坐臥に拘はらんやと云へる二句一對なり、是れ實に佛祖の謂ゆる參禪は、其修する所、坐臥に拘はるに非ずして、其證する所また決して作佛を圖るに非ざることを開示せらる、作佛とは猶ほ成佛と言はんが如し、坐臥は通常諸人の行住坐臥を謂ふ、蓋し佛祖の謂ゆる坐禪とは、世の謂ゆる行住坐臥の坐に非ざることを知る可し、其證を古人に求むれば、南岳大師曰く若し坐禪

高祖の語は「正法眼藏坐禪統」に出り

を學はゞ、禪は坐臥に非すと、法范珠林に曰く、陳の棲霞寺沙門惠布は、寺の舍利塔の西に居て經行坐禪し、誓て坐臥せずと、是れ皆坐禪の坐臥に拘はらざることを明かすもの、我か高祖これを辨して曰く、たゞ人の坐臥する坐の、此打坐佛なるに非ず、人坐の自つから坐佛佛坐に相似なりと雖も、人作佛あり、作佛人あるが如し云々、要する所、起居も亦た坐禪、動作も亦た坐禪、喫茶喫飯も亦た坐禪、屙屎放尿も亦た坐禪なるを以て、一切拘はる所あるべからざるなり、此の如きの坐禪、畢竟何の所得か有る、世人多くは思ひらく、凡そ大小權實の諸教、唯彼の佛と作らんことを圖るに

馬祖は達磨八世の法孫にして百丈の師なり
南岳は馬祖の師にして六祖の法嗣なり

外ならず、苟くも佛と作ることを得は、念佛も可なり、觀法も可なり、誦咒も勤むべく、看經も勵むべしと、到頭作佛を以て最終の目的と爲すに過ぎず、然るに今は大に之に異なり、作佛を圖ること、莫れと曰ふ、是れ實に我か直指單傳の直指單傳たる所以にして、大小權實の諸教の比擬すべきに非ざることを知る可きなり、馬祖道一禪師、曾て傳法院に住して常日坐禪す、南岳大師其法器なるを知て、往て問て曰く、大德坐禪して什麼をか圖る、一曰く作佛を圖る、師乃ち一の埒を取て、彼の庵前の石上に於て磨く、一曰く埒を磨いて作麼かする、師曰く磨いて鏡と作さん、一曰く埒を

磨いて豈鏡と成すとを得んや、師曰く埽を磨いて既に鏡と成らすんは、坐禪して豈佛と作るよを得んや、一これより猛省し、始て佛祖正傳の坐禪に入り、乃ち南岳大師の法を嗣きて、彼の百丈黃檗等の父祖となれり、然るに世の正傳を得ざる輩、多くは此話を誤り解して、南岳は坐禪を排斥せりと爲す、何ぞ知らん坐禪は初より作佛の法に非ず、若し誤て作佛の爲の故に坐禪すと言は、是れ決して正傳の坐禪に非ざることを、馬祖未た曾て正傳を得ず、故に坐禪を以て作佛を圖る、其坐禪たる既に佛祖の坐禪に非ず、況や其作佛を圖るもの、固より佛祖の道に非ず、故に南岳婆

心片々として埽を磨いて之に示し、其蒙を開いて而して正傳の大道に引入す、慈悲深重千古の標手たり、後學豈服膺せざる可べけんや、然るに尙ほ頻りに作佛を圖り、却て正傳の坐禪をも排斥せんと欲する者あるに至りては、啻に南岳の罪人なるのみならず、實に十方諸佛一切衆生の怨讎なりと謂ふべきなり、兒輩或は問ふもの有らん、何が故に作佛を圖らざると、言知らずや美食元來飽人の喫に當らす、河頭に水を賣るも誰か之を購ふ者あらんや、請ふ更に婆説一場せんか、夫れ人々各自本來圓滿の佛陀なり、圓通自在の道本宗乘、日夜に使用し得て活潑々地なるべきに、

何んの足らざる所ありてか、更に佛たらんことを求むるや、誰か汝を妨害して圓通自在ならざらしめたりや、畢竟自から輕賤暴棄して、底下縛着の凡夫と爲り、凡夫の心を以て凡夫の行を作し、更に他方に向て心外の佛を求め、境界時劫を隔歴せしめて、強て自から苦悶す、其狀恰かも自から食器を抱いて之を食ふことを知らず、妄りに他に向て饑を叫ひ、殘飯餘羹を求めて、死を免れんと欲する者の如し、豈慙れむべきに非すや、

尋常坐處厚敷坐物上用蒲團或結跏趺坐或半跏趺坐謂結跏趺坐先以右足安左脛上左

足安右脛上半跏趺坐但以左足壓右脛矣寬繫衣帶可令齊整次右手安左足上左掌安右掌上兩大拇指面相拄矣

此一段は文甚た見易し、尋常とは通常もしくは平時など言はんが如し、而して此二字暗に坐相に變通あることを顯はす、蓋し今示す所は是れ坐の正儀なり、而して其變通に至ては、則ち行住坐臥悉く坐ならざる無きを以てなり、太祖國師曰く、坐褥は須からく厚く敷くべし、打坐安樂なりと、乃ち坐物とは坐褥(俗間用ゐる所の坐蒲團)の類なることを知るべし、而して更に其上に蒲團を用ゆ、此れは禪林には單に坐蒲と

太祖の語は「坐禪用心記」

稱するものにして、徑一尺二寸圍三尺六寸に造り、中にパンヤと云ふものを容る、而して此れは跏趺坐の下に全く敷くには非ずして、只臀部の下に敷くなり、結跏趺坐半跏趺坐、各自の意樂に従がふ、此れに吉祥坐降魔坐等の稱ありて、或は其跏趺の法を異にす、然とも今は區々たる名目を問ふの要なし、只須からく祖訓に従ひて之を行ふべし、謂ゆる結跏趺坐は、先つ右の足を以て左の脛の上に載せ、更に左の足を右の脛の上に置きて、兩足交叉するなり、半跏趺坐は、但左の足を以て右の脛の上に置くのみ、然れども卑俗に行はるゝ所の槃礴胡坐まきまの類は決して坐相を調ふるこ

王三昧は「正法眼藏」中の一節

と能はざるを以て、慎て之を避くべきなり、已に跏趺了了らば、寛やかに衣被を以て之を掩ひ、脚頭の外に露出せざらんことを要す、次に右の手を仰けて、臍の前の處に置き、更に左の手を仰けて其上に重ね、拇指と拇指と指頭相對す、之を定印ぢやういんと名く、高祖大師、王三昧に示して曰く、驀然とし盡界を超越して、佛祖の屋裡に太尊貴生なるは、結跏趺坐なり、外道魔黨の頂顛を蹈翻して、佛祖の堂奥に箇中人なることは、結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するは、たゞ此一法なり、乃明かに知りぬ、結跏趺坐は是れ三昧王三昧なり、是れ證入なり、一切の三昧は此王三昧の眷屬なり云々、

跏趺坐の尊勝なる以て知るべきなり、
 乃正身端坐。不得左側右傾。前躬後仰。要令耳
 與肩對。鼻與臍對。舌掛上腭。唇齒相着。目須常
 開。鼻息微通。身相既調。欠氣一息。左右搖振。兀
 兀坐定。

既に跏趺して定印を結ぶと雖も、未だ正身端坐なら
 ざれば坐相圓滿せず、故に此には前後左右に俯仰傾
 斜することを誡めらる、其法は耳と肩とを對し、鼻と
 臍とを對せしめんことを要すとなり、蓋し跏趺して
 而して此の如くすれば、脊梁骨整然として直立し、乃
 ち正身端坐と爲れはなり、舌を上腭に掛け、唇齒相

辨道法もまた「正法眼藏」中の
 一篇

太祖の語は「坐禪用心記」

覺觸廿七覺支の「佛數字典」
 に曰く初心の行者定中に於て
 初禪清淨の色法を發し其身根
 に觸るれば心大に覺悟す其時
 初て此觸を覺す故に覺支と名
 く是なり

着くるとは、但其口を閉ちるのみ、目は須からく常に
 開くべしとは、敢て張らず又敢て閉ちざるを謂ふ、辨
 道法に曰く、切に忌む眼を閉つることを、眼を閉つれ
 は昏生す、頻々に眼を開けは、微風眼に入て昏容易に
 醒むと、鼻息微かに通すと云ひ、欠氣一息と云ふは、氣
 息を調ふるなり、太祖國師曰く、調息の法は暫らく口
 を開き張り、長息は則ち長息に任せ、短息は即ち短息
 に任せ、漸々に之を調ひ、稍々として之に隨ひ、覺觸來
 る時自然に調適して、而して後に鼻息通するに任せ
 て通すべし、又曰く欠氣して安息すとは、口を開きて
 氣を吐くと一兩息するなり云々、身相既に調ふと云

ひ、左。右。搖。振。す。と云ふは、調身の術なり、太祖國師曰く、須からく坐定して身を搖がすこと七八度、麁より細に至ると是なり、此の如くにして兀々として坐定す、高祖大師曰く、其骨を折き髓を碎くを觀る、亦た難からずや、心操を調ふるの事尤も難し、長齋梵行も亦た難からずや、身行を調ふるの事尤も難し、若し粉骨を貴ふ可くんは、之を忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者これ少し、齋行の者貴ふ可くんは、古より多しと雖も、悟道の者これ少し、是れ乃ち心を調ふること甚た難きか故なり、聰明を先とせず、學解を先とせず、心意識を先とせず、念想觀を先とせず、向來都へて之を用

ゐず、而して身心を調へて以て佛道に入るなり云々、正身端坐せずんは有るべからざる所以、切に參熟して明知すべきなり、

思量箇、不思量底、不思量底如何、思量、非思量、此、乃、坐禪之要術也。

是れ乃ち調心の妙訣にして、坐禪の要術なり、蓋し此一節全く藥山大師の公案を拈提せらる、藥山惟儼禪師は達磨九世の嫡孫にして、我が高祖十六代の曇祖なり、或時一僧あり問て曰く、兀々地に什麼をか思量す、師曰く箇の不思量底を思量す、僧曰く不思量底如何か思量せん、師曰く非思量と、我か高祖大師曾て之

を拈して曰く、有心已に謝し、無心未た様ならず、今生の活命は清淨を上と爲すと、應に知るべし思量は是れ有心にして、不思議底は是れ無心なり、而して今其不思議底を思量すと云ふ、其有心に非ず、亦た無心に非ざることを、有無を超絶して、識情俱に裂斷せる、此れ之を非思量と謂ふ、蓋し藥山は三祖を祖述し、三祖は文珠を憲章す、佛境界經に文珠菩薩世尊に問て曰く、無爲は是れ何の境界ぞ、佛言く無爲は非思量の境界なり、文珠曰く非思量の境界は是れ佛境界なり、何を以ての故に、非思量の境界中には、文字あること無し、文なきか故に辯説する所なし、辯説なきか故に諸

つふきには文珠師利と謂ふへし、辯して妙吉祥と爲す

三祖僧璨、臨して經智大師と曰ふ

の言論を絶す、諸の言論を絶する者は、是れ佛境界なり云々、三祖大師、信心銘に之を提起して曰く、虚明にして自から照し、心力を勞せず、非思量の處、識情測り難しと、是等佛祖の親訓に參熟せば、非思量の様子ほゞ信解するを得ん、抑も不思議底を思量するの功夫、また多端、達磨大師常に二祖に教へて、外に諸縁を息め、内心喘くと無く、心牆壁の如く、以て道に入る可しと言ふ、二祖種々に心性の理を説けども、道未た契はず、唯其非を遮て爲めに無念の心體を説かず、二祖曰く、我已に諸縁を息む、大師曰く、斷滅と成り去ること無しや、二祖曰く、斷滅と成らず、大師曰く、何を以て之

二祖の因縁、傳燈錄に出つ

を驗せん、二祖曰く了々として常に知る、故に之を言ふも及ふべからず、大師曰く此は是れ諸佛所傳の心體なり、更に疑ふこと莫れど、是れ其標準なり、已に諸縁を息めて斷滅に似たるもの、即ち是れ不思議底の思量なり、然れども了々として常に知る、即ち是れ思量底の不思議なり、達磨これを即證して無念の心體と爲す、即ち是れ非思量の佛境界を直指せるなり、後來趙州和尚曰く、汝但究理坐看三二十年せよ、若し會せずんば、老僧が頭を截取し去れ、老僧四十年雜用心せずと、是れ亦た其一例なり、黃龍死心新禪師曰く、參禪は須からく是れ放下着なるへし、箇の甚麼をか放

趙州觀音院從諗禪師

黃龍の語「禪關策進」に引けり

下せん、箇の四大五蘊を放下し、無量劫來許多の業識を放下し、自己脚跟下に向て推窮して看よ、是れ甚麼の道理ぞと、推し去り推し來らば、忽然として心華發明して、十方刹を照さん、之を心に得て之を手に應すと謂ふ、便ち能く大地を變して黄金と爲し、長河を攪て酥酪と作す、豈平生を暢快せざらんや云々、此の如きも亦た得たり、彼の公案を拈提し、古則を攻究するが如き、亦た唯此不思議底を思量するの善巧方便なり、初め黃檗希運禪師垂示して曰く、若し是れ丈夫の漢ならば、箇の公案を看よ、僧あり趙州に問ふ、狗子に還て佛性ありや也、た無しや、州曰く無と、但二六時中、

黃檗の語「傳心法要」に見ゆ

高祖の語「學道用心集」

箇の無字を看よ、晝參夜參、行住坐臥、着衣吃飯の處、屙屎放尿の處、心々相顧み、猛に精彩を着けて、箇の無字を守る、日久く歳深くして、打成一片ならば忽然として心華頓に發き、佛祖の機を悟らん云々、是れ實に後世看話の濫觴にして、其要とする所は打成一片に在り、我が高祖大師曰く、心に於ても身に於ても、住すること無く着すること無く、留まらず滯ふらざれ、趙州に僧問ふ、狗子に還て佛性ありや也、た無しや、趙州曰く、無、無字の上に於て擬量し得んや、擁滞し得んや、全く巴鼻なし、請ふ試みに手を撒して看よ、身心如何、行李如何、生死如何、佛法如何、世法如何、山河大地如何、人

行李は猶ほ行狀と謂はんか、如し

動靜二相了然不生は楞嚴經の語

「坐禪用心記」

雲門山の文偃大師

畜家屋畢竟如何、看來り看去らは、自然に動靜の二相了然不生ならん、此不生の時、是れ頑然なるには非す云々、我か高祖の功夫を人に教ふる、概ね此の如し、何ぞ強がちに看話を嫌ふと言はんや、太祖國師曰く、心若し散亂するときは、心を鼻端丹田に安して、出入の息を數へよ、猶未た休まざる時は、須からく一則の公案を提撕して舉覺すべし、謂く是れ何物か、恁麼に來る、狗子無佛性、雲門の須彌山、趙州の栢樹子等の没滋味の淡、是れ其所應なり云々、其看話の様子亦た知るべきなり、要する所は有心にして無心、無心にして有心なるを、不思議底を思量するの梗概と爲す、其證を

金剛般若波羅密多經一卷あり
大般若經第五百七十七を異譯
別行したるものに係る

佛語に徴すれば、金剛經に曰く、應に住する所無くして而して其心を生すべしと、是れ其大意なり、住とは住着の意、即ち事物に滯礙せらるゝを謂ふ、要する所は言句に滯らず知解に涉らず、模擬を離れ、軌轍を去て、單々に親參實究し去らば、庶くは佛祖の諸人を欺かざるを知らん、

所謂坐禪、非習禪也、唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。

坐禪は習禪に非すと云へる一句、古今門外漢の誤認妄評を辯斥せらる、唐の南山道宣律師續高僧傳を著はして習禪の一部を立て、印度支那の習禪者を列傳

南山は律宗の高祖

す、而して其人概ね大小顯密諸教の禪那を習學したる者のみ、然り而して達磨大師をも亦た其中に序列して、習禪の一人と爲す、後來覺範供禪師石門林間錄を著はし、其妄を辯して曰く、菩提達磨初め梁より魏に之きて、嵩山の下に經行し、少林に倚仗して、面壁燕坐するのみ、習禪には非ざるなり、久うして世人其故を測ること無し、因て達磨を以て習禪と爲す、夫れ禪那は諸行の一のみ、何ぞ以て聖人を盡すに足らんや、而るに當時の人これを以てし、史を爲る者又從て茲を習禪の列に傳し、枯木死灰の徒と伍たらしむ、然と雖も聖人は禪那に止まるに非ず、而かも禪那に違せ

す云々、我か高祖「辨道話」の中に亦た示したまはく、六
 度中の禪度にあらず、三學中の定學にあらず、諸佛の
 自受用三昧なりと、切に宜しく參熟して、的旨を得べ
 きなり、然らば坐禪は如何なる法なりやと云ふに、唯
 是れ安樂の法門にして、菩提を究盡するの修證なり
 と示さる、安樂とは天台の「文句」に身に危険なし、故に
 安なり、心に憂惱なし、故に樂なりと云へる、簡にして
 要を得たり、今我か謂ゆる坐禪は身心を脱落して、脱
 落を身心と爲す、復た危険憂惱の名をだも聞かず、故
 に安樂の法これに過ぎたるは無し、法門の門の字、深
 く意を留むへからず、敢て坐禪を以て能入所入を論

天台智者大師三大部を著はす
 「文句」其なり蓋し法華經を
 註釋したるものに係る

すへきに非されはなり、唯箇の安樂の法、直に是れ菩
 提を究盡するの修證なりと示さる、菩提は梵語之を
 漢譯して道と曰ふ、謂ゆる圓通自在の大道にして、人
 々具足個々圓成せる所なり、然れども「辨道話」に示し
 たまへるか如く、此法は人々分上ゆたかに具はれり
 と雖も、修せざるには顯はれず、證せざるには得るこ
 と無きを以て、必らず之を究盡するの修證を要する
 なり、究盡とは其全分を體悉して、缺くることなく、餘
 ることなきを謂ふ、修證の二字、敎家普通の解に依れ
 は、修行は證悟を得るの手段にして、證悟は修行より
 得る所の結果なり、然るに今我か佛祖の正傳は、因果

同時にして、修證一如なり、何となれば元來迷悟なく
 又凡聖なきを以てなり、「辨道話」に曰く夫れ修證は一
 に非すと思へる、則ち外道の見なり、佛法には修證是
 れ一等なり、今も證上の修なるが故に、初心の辨道即
 ち本證の全體なりと謂ゆる本證とは是れ圓通自在
 の大道、即ち諸佛の菩提なり、其全體を成辨するに、正
 身端坐の坐禪を以てす、故に坐禪を稱して又辨道と
 曰ふ、即ち菩提を究盡するの謂なり、譬へは十全健康
 の人の、常に衛生の術に怠たらず、寢食動作皆其法あ
 るか如し、此れ箇の衛生、直に健康の全體にして、固よ
 り疾病なきが故に、疾病を除くが爲めの衛生に非す、

本證は本來證果の佛陀なり
 と云ふの意

又固より健康なるを以て、健康を求むるが爲めの衛
 生にも非す、健康即衛生にして、衛生即健康、この間に
 前後なく因果なし、四支五官安樂にして、而して身體
 の妙用欠ることなく餘ることなし、是れ之を健康を
 究盡すると謂ふ、今謂ゆる修證も亦た然り、法譬參照
 して宜しく其大旨を瞭知すべし、

公案現成。羅籠未到。若得此意。如龍得水。似虎
 靠山。當知正法自現前。昏散先撲落。

此一節、坐禪の功勳を示さる、公案の二字中世以來只
 古徳問答等の禪話を稱するの名と爲すに似たり、是
 れ大に誤り來れるなり、中峰禪師の「山房夜話」に曰く、

公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、法の所在にして王道の治亂實にこゝに係ると果して然らば其要は法の所在にして、王道の治亂こゝに係ると云ふに在り、試に之を佛法に反照して見よ、道の所在にして佛法の通塞こゝに係ると云ふの意なるに非すや、嗚呼豈佛法の通塞只古徳問答等の禪話に依て決せらる可き者ならんや、天地日月山川草木人天鬼畜蠢動舍靈有情非情森羅萬象、何者が復た道の所在ならざらん、何事か復た佛法の通塞に係らざらん、故に佛祖の正傳に於ては、一切諸法直に皆以て現成公案と謂ふ、高祖大師曰く、諸人直に須らく箇の現成公案を辨肯すへ

し、作麼生か是れ現成公案、便ち是れ十方諸佛古今諸祖是れなり、而して今現成す、諸人見るやと、然れども人或は其諸佛と云ひ諸祖と云ふの語路に轉却せられて、未だ現成公案を見ること能はざらんを慙み、更に語を續て示したまはく、今や簾を掲げ牀に上り牀を下る是なり、好箇の現成公案、諸人何としてか不會なると、又是れ其簾と云ひ牀と云ふに拘はること勿れ、造次顛沛悉く現成公案ならざるは無し、然りと雖も人間到る所誰か簾を掲げざらん、誰か牀に上り牀を下らざらん、苟くも坐禪を缺けは、以て現成公案と爲すべからず、既に佛祖の正儀に依て身心を調整し、

箇の不思議底を思量し來る、此に於てか一切諸法全體直下に公案と成り來る、此間何の羅籠とか説かん、羅籠とは鳥罟を羅と曰ふ、鳥を捕ふるの網なり、籠は鳥檻なり、鳥を囚置するの器なり、今無明惑障の圓通自在を纏縛するに譬ふ、未到の未の字面山和尚未の字の寫誤と爲す、誠に妥當なるに似たり、論語の註に未は無なりと云へるもの是なり、既に是れ公案規成す、豈無明惑障の到るべきあらんや、嘗に羅籠到ると無きのみならず、其圓通自在たる、恰かも龍の水を得るか如く、虎の山に靠るに似たりとなり、獐龍元來雲霧を吞吐するの能力ありと雖も、水を得るに及て、始

面山端方和尚は享保間の碩學「龍動坐禪機問解」二卷を著し、其他述作甚だ多し

て龍の龍たる所以を見る、猛虎もとより威風を有すと雖も、山に靠るに非ざれば、未だ其本分を呈すること能はず、今夫れ人々の本具の大道、箇の正身端坐に依て、始て圓通自由なることを得るに譬へたるなり、當に知るべし、正法自づから現前し、昏散先づ撲落するを、正法とは謂ゆる圓通自在の大道、又本來の面目と稱し、或は菩提と名くる者、謂ゆる正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門是なり、春花秋月是なり、山川草木是なり、造次顛沛是なり、此の如きの正法既に現前す、豈昏散如何を問はんや、昏は昏沈にして、身心の疲憊蒙昧なるを謂ふ、初心の坐禪若し正傳の教訓を

永明延壽禪師「宗鏡錄」百卷を著す

太祖の語は「坐禪用心記」に出

受はざれば、多く此病に落つ、散は散亂にして、身心の放縱蕩逸なるを謂ふ、然るに今は身心脱落して、脱落を身心と爲す、昏散ともに撲落する所以なり、撲落とは猶ほ掃盡と謂はんが如し、永明壽禪師の偈に曰く、撲落非他物、縱横不是塵、山河並大地、全露法王身、と、豈然らざらんや、

若、從、坐、起、徐、徐、動、身、安、詳、而、起、不、應、卒、暴、

此四句は、起坐の法を示さる、文誠に見易し、太祖國師曰く、若し定より起たんと欲せば、先づ兩手を兩膝の上、上に仰き安じ、身を搖かすこと七八度、細より龜に至る、口を開きて氣を吐き、兩手を伸べて地を捺へ、輕々

に座を起ち、徐々として行歩し、須からく順轉順行すべし云々、起坐出定の様子、思ふて知るべきなり、安詳而起而不卒暴は皆、法華經の語、安詳は面山和尚安穩保養の義と爲す、

嘗、觀、超、凡、越、聖、坐、脫、立、亡、一、任、此、力、况、復、拈、指、竿、針、鎚、之、轉、機、舉、拂、券、棒、喝、之、證、契、未、是、思、量、分、別、之、所、能、解、也、豈、爲、神、通、修、證、之、所、能、知、也、

以下古人の例證を擧げて、坐禪の力の活用を開示せらる、超凡越聖とは天上人間修羅餓鬼畜生地獄を六凡と云ひ、聲聞緣覺菩薩佛陀を四聖と云ふ、今夫れ坐禪は畜に六凡を超越するのみならず、亦た四聖を超

雲門文偃大師は雲門宗の高祖

一休和尚は後小松天皇の皇子

越するとなり、其超凡と云ふは固より論なし、其越聖と云ふは、古來高僧の佛を呵し祖を罵しる者、乃ち雲門大師の釋迦如來を罵しりて、一棒に打殺し、狗子に與へて喫せしめんと云へるが如き、一休和尚の釋迦と云ふいたづら者が世に出で、多くの人を迷はするかなと云へるが如きの類是なり、坐脱立亡は臨終の活機輪、即ち達磨大師は端坐して逝去し、四祖五祖六祖皆安坐して寂す、立亡とは三祖大師の寂する、大樹の下に合掌し立ちながらに終ると云ひ、霍山通禪師の火焰の中に立ちて逝すと云ふの類なり、是等の例證古今の史傳に多く見る所、今枚舉するに違あら

俱胝和尚

南泉普願禪師

船子德誠禪師

迦那提婆は第十五祖なり

洞山良价禪師

す、以上坐禪の人の自家立脚の自在なるを證し、以下坐禪の人の他を接して師となる榜様を擧ぐ、謂く指竿針、鎚拂拳棒、喝と指は俱胝和尚凡そ人の問ふ所ある毎に、唯一指を立つ、臨終に衆に謂て曰く、我れ天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡なりと、乃ち一指を豎て、逝す、竿は南泉禪師に僧問ふ、百尺竿頭如何か、進歩せん、泉曰く、更に一步を進めよ、又船子和尚の竿頭絲線任君弄と云へるの類、針は龍樹菩薩の迦那提婆を接する、先つ侍者をして水一椀を面前に呈せしむ、提婆乃ち一針を取て之に投す、又神山僧密禪師把針の因み、洞山和尚問ふて曰く、什麼をか作す、密曰く

駁訶迦葉は釋尊の施綱即ち四
天の初祖なり
石頭希遷禪師
青原行思禪師

把針せり、山曰く把針の事作麼生、密曰く針々相似たりと云ふの類、鎚は槌と相同し、世尊陞座すれば文珠白槌し、文珠三所に安居すれば、迦葉擯槌を打つ。の類、拂は石頭和尚初て青原禪師に參す、原曰く汝何所より來る、頭曰曹溪より來る、原乃ち拂子を豎起す、又馬祖大師百丈に問ふ、汝何の法を以て人に示す、丈拂子を豎起すの類、拳は黃檗一日拳を捏て曰く、天下の老和尚總て這裏に在り、又雪峰一日手を伸へて僧の面前に向ひ、拳を握て曰く、盡乾坤若は凡、若は聖、若は男、若は女、若は僧、若は俗、山河大地都べて這の一握の裡に在りと云へるの類、棒は德山和尚凡そ僧の來て門

雪峰存禪師

德山宣鑑禪師

臨濟義玄禪師は臨濟宗の高祖

に入るを見れば、便ち棒す、其他三十棒を行ずる等の類、頰る多し、喝は臨濟大師に四喝あり、或時の一喝は踞地獅子の如く、或時の一喝は金剛王寶劍の如く、或時の一喝は天下人の舌頭を坐斷し、或時の一喝は一喝の用を作さすと云ふの類、大凡是等の轉機も證契も、皆未た是れ思量分別を以て其宗旨を解了し得べきとには非ず、又神通修證を以て其本意を識知し得べきとにも非ずとなり、轉機と云ふは機輪を運轉すると言はんが如く、彼の拂拳棒喝等を自由に使ひ得る邊に於て之を言ひ、證契は證悟印契の謂にして、其拂拳棒喝を自由に使ひ得るに至れる悟道の邊に於

て之を言ふ、而して之を二句に分ちたるは、唯文章の便宜のみ、別に意趣あるには非ず、神通修證と云へると、修證の二字に別の意味なし、但神通と云ふは印度に六神通の學あり、中に於て其五は外道の徒も皆能く之を修し得て自由なる者あり、但六の漏盡通は、獨り佛弟子の證得する所なりと云ふ、然れども今祖師門下の證契轉機に至ては、決して尋常神通自由の者せ、雖も、其的旨に通すると能はずと云ふなり、「傳燈錄」等に許多の因縁あり、中に就く大耳三藏の慧忠國師に於ける、天台途上の異僧の黃檗禪師に於ける、仰山和尚に見えたる西天の異僧の如き、皆其神通の祖道

清涼慧忠國師の著「正法眼藏」
他心通の篇を見よ

六塵は色聲香味觸法なり

に於ける徑庭如何を知るに足れり、看んと要せば往て看よ如何なるか、是れ神通妙用、飢い來りては飯を喫し、困し來れば眠る、此外更に何の用心をか須るん、可爲聲色之外、威儀、那非、知見之前、軌則者歟。前に非思量の境界は神通等を以て知り得らる可きに非らざることを示したまへるを結ばせられて、聲色以外の威儀にして知見以前の軌則なるぞと示されたるなり、聲色は六塵の中の二塵を擧げて、他の四塵を攝す、知見は即ち知識見解にして、謂ゆる思量分別なり、威儀と云ひ軌則と云ふは、文章の語便のみ、要する所圓通自在の大道に逍遙して、自他の受用不盡

なることは、眼見耳聞の及ぶ所にも非ず、又智慮想像の窺ふべきにも非ず、其智慮想像の未だ兆さざる以前、又其眼見耳聞の以外に於て、一種特別なる軌則威儀の存する者に依らざれば、決して此に到ること能はず、然らば其聲色以外の威儀、知見以前の軌則と云ふは、如何なる軌則威儀ぞと云ふに、即ち佛祖正傳の坐禪是なりと云ふの意なり、是れにて坐禪の法則、及び其功德は既に示し盡させられたれば、以下は謂ゆる普勸の意にて、更に普ぬく坐禪の實行を勸誡したまふ。

然、則、不、論、上、智、下、愚、莫、簡、利、人、鈍、者、專、一、功、夫。

正是辨道、修證自、不染汚、趣向更、是平常者也。

「論語」に唯上智と下愚とは移らすと有れども、佛法は然らず、大智度論に曰く、是の門は利根の菩薩摩訶薩能く入る、鈍根の菩薩も亦た是の門に入るべし、是の門は無礙なり、菩薩摩訶薩一心に學ぶ者は、皆是の門に入る云々、其文は異なれども、其意は今の祖訓と同一なり、專一は餘事を雜えず、謂ゆる諸縁を放捨し、萬事を休息するの意、功夫は法の如く坐禪を務めて怠たらざるなり、其怠たらず坐禪する、直に是れ圓通自在の大道を辨肯する所以なるを以て、正に是れ辨道なりと云ふ、專一の功夫は是れ修行にして、其修行全

く辨道の證悟なり、證即ち修にして、修即ち證、謂ゆる修の外に證を見ざる、修證不二の坐禪なるが故に、修證自づから染汚せすと云ふ、凡そ染汚とは事物の眞面目を損壞するを謂ふ、佛法元來修證の二途あり、然れども證を外にするの修は、修の眞面目と爲さず、又修を離れたるの證は、證の眞面目と爲さず、然るに、若し修證に前後因果ありて、互ひに對待すること有らば、是れ則ち修證を染汚する者なり、南嶽和尚曾て六祖大師に參す、祖曰く何の處よりか來る、嶽曰く嵩山より來る、祖曰く何物か恁麼に來る、嶽曰く説て一物に似たるも即ち中らす、祖曰く還て修證すべきや否

南嶽の因縁は「修證錄」

や、嶽曰く修證は即ち無きにあらず、染汚することは即ち得ず、祖曰く只此の不染汚、諸佛の護念したまふ所なり云々、今我か高祖此の舊公案を拈提し來て、吾人に示させられたるなり、既に染汚なきの修證なり、故に其趣向する所、更に是れ平常なる者なり、趣向は道路を往くに譬ふ、日々夜々の運作轉動を謂ふなり、平常は平坦通常の意にして、險阻艱難なきを謂ふ、三祖大師曰く至道は無難なりと、道州和尚曾て南泉禪師に問ふ、如何なるか、是れ道、泉曰く平常心是れ道、州曰く還て趣向すべきや、泉曰く向はんと擬すれば、即ち乖く、州曰く擬せざんは如何が是れ道なるを知ら

三祖の語「信心銘」

道州の問答「修證錄」

ん、泉曰く道は知と不知とに屬せず、知は是れ妄覺にして、不知は是れ無記云々、久々に熟參して古人の我を欺かざるを知れ

凡夫自界他方西天東地等持佛印一擅宗風唯務打坐被礙兀地雖謂萬別千差祇管參禪辨道

普勸の中に前節は如何なる機根の人と雖も坐禪を修證すれば其功德甚大なることを示され、此一節は如何なる國土に在ても坐禪を修證すべき旨を示さる、自界とは釋迦如來の化土たる安婆世界を謂ひ、他方とは阿彌陀佛の化土たる極樂世界の如き、藥師如

來の化土たる瑠璃光世界の如きを謂ふ、西天は印度を指し、東地は支那日本等なり、佛印とは佛陀の印證と云ふの義にして、佛法の眞偽は佛に非ざれば之を證すると能はず、既に佛祖の印證を得たる者は則ち佛祖なり、故に祖師門下に在ては尤も印可證明を尊ぶ、然るに今は十方國土等く佛印を護持し、一はら宗風を擅まゝにせよと示さる、要は到る所に佛祖の心印を護持し到る所に佛祖の宗風を盛んに行なひ、何の所に在ても唯打坐を務めて、兀地に礙えらるゝやうにせよと云ふに在り、兀地は兀々地を省畧したるにて、非思量の境界を形容したるなり、礙えらると云

へるは、障礙せらるゝ義には非ず、日々夜々悉く兀々地と成り來りて、他の諸縁を容るゝことなきを謂ふ、即ち充實の意を礙えらると云へるなり、學道用心集に道に礙られて當處に明了と云ひ、悟に礙られて當人圓成と云へるも、亦た同義なり、萬別千差は謂ゆる上智下愚利鈍者、其他百千の機根に差別ありとも、等しく祇管に參禪辨道せよとなり、花前月下、海底峰頂、佛殿東司、驢胎馬腹、何の處にか坐禪すべからざらん、

何抛却自家之坐牀、謾去來他國之塵境、若誤一步、當面蹉過。

東司とは禪林に廁を稱するの
名

十方國土到る處に坐禪辨道せよと云へる、前節の意を更に進めて、各自の脚下に及ぼして、直接に訓誡したまふ、而して底意は回光返照の退歩を勸示せらる、自家の坐牀を抛却して、他國の塵境に去來すとは、人々具足個々圓成せる圓通自在の大道を省りみず、八萬四千の塵勞に沈溺して、四苦八苦に煩悶せるを謂ふ、而して其此に到る所以は、第一最初の一步に在り、故に若し一步を誤まらば、當面に蹉過すとなり、當面は面前と言はんが如し、蹉過は歩を失して邪路に入るなり、蓋し此二句暗に冒頭の毫釐も差あれば、天地懸かは隔たると云へるに照應して、之を結びたまへ

るに似たり、各自脚下を照顧せよ、

既得人身之機要。莫虛度光陰。保任佛道之要機。誰浪樂石火。加以形質如草露。運命似電光。倏忽便空。須臾即失。

此一節は無常を示して普勸せらるる人身の機要と佛道の機要とを隔對にし、誰も石火を樂しと思ふ者も有るまじければ、虚く光陰を度らざるやうにせよと訓誡したまふ機要と云ふ要機と云ふ別意あるに非ず。機は機關と言はんが如く、要は肝要と言はんが如し、言ふ心は一切萬物の中に於て、尤も肝要なる機關たる人間の身を受け、一切諸教の中に於て、尤も肝要

「修證義」は祖語を集めて教會の訓誡となしたる冊子なり

なる機關たる佛道を保任したるには非すやとなり、黃龍死心新禪師曰く、人身は得難く、佛法は聞き難し、此身今生に向て度せずんは更に何の生に向てか此身を度せん云々、石火は兩石相撃ちて發する所の火光、其甚た捷疾なるを謂ふ、是に於て形質は草露の如く、運命は電光に似たりと言ふ、形質は各自の皮肉身體にして、運命は各自一生の時運命數なり、其脆弱にして消滅し易きこと、草上の露の如く、掣電の光の如く、倏忽に便ち空しく、須臾に即ち失すとなり、「修證義」に曰く、人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり、今我等宿善の助くるに依て、既に受け難き人身を受け

たるのみに非ず、遇ひ難き佛法に遭ひ奉れり、生死の中
の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにし
て、無常の風に任すること勿れ、無常憑み難し、知らず
露命いかなる道の草にか落ちん、身既に私に非ず、命
は光陰に移されて、暫らくも停め難し、紅顔いつくへ
去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし云々、祖訓深切肝
に銘し、魂に銘すべし、

冀參學、高流久習、摸象勿怪、眞龍精進、直指端
的之道、尊貴絕學、無爲之人、合沓佛々之菩提、
嫡嗣祖々之三昧、

以下いよく勸誡を結ばせらるゝなり、高は敬稱に

亢は岡の如し

して流は流輩なり、參禪辨道の雲兄水弟を指す、摸象
は六度集經に曰く、鏡面王、群盲を引て象を摸せしむ、
王問て曰く、汝曾て象を見るや、對て曰く、我曾て俱に
見る、王曰く、象は何の類ぞ、足を持つ者對て曰く、象は
漆桶の如し、尾を持つ者曰く、象は掃帚の如し、尾の本
を持つ者曰く、杖の如し、腹を持つ者曰く、鼓の如し、脇
を持つ者曰く、壁の如し、背を持つ者曰く、高亢の如し、
耳を持つ者曰く、簸箕の如し、頭を持つ者曰く、魁の如
し、牙を持つ者曰く、角の如し、鼻を持つ者曰く、大索の
如しと、復た王の前に於て共に訟て曰く、大王よ象は
我か言の如しと、王大に歎して曰く、瞽なるかな瞽な

るかな、汝猶ほ見す、今や眼なきが爲めに自ら謂ふ、諦かに觀たりと云々、此事又「涅槃經」にも見えたり、今我が高祖此故事を引て、從前の教者禪客未だ曾て正傳を得ず、謾りに名相を分別し、知解情量を逞くして、以て佛法に擬するを誠めたまひしなり、眞龍を怪むとは、申子に曰く昔し葉公子高と云へる者、甚た龍を好む、居室彫文皆龍に象どる、天龍聞て之に下り、頭を膺より窺ひ、尾を堂に拖く、葉公之を見て其魂魄を失ふ、是れ葉公龍を好めるに非ずして、夫の龍に似て龍に非ざる者を好めるなり云々、蓋し從前世人の信して以て佛法と爲す所のもの、恐らくは佛法に似て而し

て佛法に非ざる者のみ、然るに今佛祖正傳の王三昧を見聞して、却て之を怪むこと、彼の葉公の眞龍に魂を消すが如くなること勿れとなり、然らば則ち其眞龍たる者果して如何と云ふに、直指端的の道に精進し、絶學無爲の人を尊貴し、佛々の菩提に合沓し、祖々の三昧を嫡嗣せよと訓誡したまふ、佛々の菩提は即ち直指端的の道にして、謂ゆる圓通自在の道本宗乘なり、此道に合沓するの法を、祖々の三昧即ち身心脱落の坐禪と爲す、而して其法を修し、其道を證し、修證不二なる人を絶學無爲の人と稱するなり、佛祖の大道是に至りて能事畢る、精進は六波羅密の一にして、

精勵進趣の義、今の世の俗に勉強と言はんが如し、直指は枝末に涉らず、直に本源を指斥するの義、謂ゆる教外別傳不立文字直指人心見性成佛の祖語に本づく、端的は端直的實の義にして、直に面前所現の事物に就て其赤牒々露堂々たる所を謂ふ、佛祖の修證皆然らざるは無し、合沓は積重と言はんが如く、佛々祖々嫡々相承して、千重萬重綿々密々なるを形容す、看よ看よ、江上有山山遠近、波間無路路縱横、

久爲^{ナカニ}恁^ニ麼^ノ須^ニ是^ノ恁^ニ麼^ノ寶藏自開受用如意^{ナラン}

初めに恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよと言て、坐禪の正儀を開示せられ、今や其訓誡を

雲居道膺大師は洞山大師の嫡嗣

結ぶに及びて、亦た久しく恁麼なることを爲さば、須からく是れ恁麼なるべしと示諭せらる恁麼は此の如しと云ふの意、前に既に辯じたるが如し、此の如きの修證を爲さば、此の如きの功德あるべしと云へる、文義解し易し、今復た贅辯せず、雲居大師曰く、體得底の人は、心臘月の扇の如く、口邊直に得たり醜の出つることを、是れ汝が強て爲すに非らず、任運に此の如し、恁麼の事を得んと欲せば、須からく是れ恁麼の人なるべし、既に是れ恁麼の人、何ぞ恁麼の事を愁へん、云々祖訓蓋し是等の典實に據りたまひしなる可し、寶藏とは人々各自圓通自在の大道を謂ふ、大珠慧海

禪師曰く、貧道、江西和尚の汝が自家の寶藏一切具足して使用自在なり、外に求むることを假らざれと言ふを聞きしより、我れ一時に休し去て、自己の財寶身に隨て受用す、快活なりと謂ふ可し云々、亦た此意なり、受用に自受用あり、他受用あり、梵網菩薩戒經の疏に、賢首大師曰く、毘盧舍那、此に光明遍照と曰ふ、然して二義あり、一は内に智光を以て眞法界を照す、此れ自受用の義に約す、二は外に身光を以て大機に照應す、此れ他受用の義に約すと、應に知る可し、受用如意と云ふは、是れ法身佛の境界なることを、嗚呼此の刹那生滅の臭皮袋を以て、直に法身佛の境界を運轉す

賢首大師法藏は華嚴宗の高祖

ることを得る、我か正傳の坐禪に非ずして、復た何くにか之有らん、然と雖も適來山僧許多の言説、漫に趙壁を指點して強て瑕疵を舉示するに似て相似たり、趙壁果して瑕疵ありや也た無や、若し夫れ秦主をして眼あらしめは、何ぞ曾て相如の慢を容れん、各自宜く眼睛を刮開じ、子細に點檢して始て瞭々たるべし、若し或は然らず山僧許多の言説を記取して、以て佛祖の法身に擬することあらは、唯是れ佛祖の罪人なるのみならず、亦た是れ山僧永劫の怨讎ならん、至囑

獅乳終

明治廿八年十月廿六日印刷
明治廿八年十月廿九日發行

定價金拾五錢

編輯者

石田靈峰

芝區公園廿四號一番地

發行者

兒島碩鳳

麻布區北日夕窪町二番地

印刷者

根岸高光

牛込區市夕谷加賀町一丁目廿二番地

印刷所

鐵秀英舍第一工場

牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

發行所

白雲精舍

麻布區北日夕窪町二番地

賣捌所

國母社

京橋區加賀町十四番地

版權
所有

あらいそのなみ
もよせぬたか
いはにかきもつ
くべきのりなら
はこそ



特52

33

獅乳

国立国会図書館

019490-000-7

特52-33

獅乳

石田 靈峰/編

M28.10

ABG-0215

